

<p>第29号 2008年1月1日 発行</p>	<h1>同推くん</h1>	<p>発行・編集 海蔵地区人権・同和 教育推進協議会 広報部 事務局地区市民センター内 電話 333-8770</p>
----------------------------------	---------------	---



21世紀のテーマ「人権・環境・平和」の 着実な前進をめざした学習活動を進めよう！

皆様 明けましておめでとうございます。
2008年は、国連総会で「世界人権宣言」
が採択されて60周年の節目の年にあたり
ます。宣言採択の願いは実現しているで
しょうか。すべての人間に保障されてい
る基本的人権が差別によってないがしろに
され苦しんでいる人たちが今なお多く存
在していることはご承知のとおりです。
また、熱帯雨林の伐採、二酸化炭素の過剰
な放出などによる地球の温暖化やオゾン
層の破壊など地球環境が著しく破壊され
ていることや相次ぐ異常気象に不安を感じ
ない人はいないのではないのでしょうか。
また、地域紛争は絶えず、日々テロの脅威

に怯える人々や、飢餓や貧困に苦しむ人々
も決して少なくありません。

世界人権宣言は、人類に悲惨な結果をも
たらした世界大戦の反省から、教訓を集め
て人類共通の願いを謳いあげたものです。
①部落差別をはじめとするあらゆる差別
をなくすために、②世界の共通語になった
「MOTTAINAI」の視点から日常生活を見直
すために、③戦争は最大の環境破壊に繋
がることから、平和の大切さを世界に向
かって、堂々と胸をはって発信できる
国になるために、学習活動に積極的に参
加し、先ずは、一人ひとりが出来ること
から始める年にしようではありませんか。

大正デモクラシーと民主主義

～いま求められる大正デモクラシーの流れを読み解く眼～

「大正デモクラシー」と呼ばれるのは、
一般的に日露戦争後の1905（明治38）年
頃から、1931（昭和6）年9月の「満州事
変」前夜までのほぼ四半世紀を指していま
す。この時期は、大日本帝国憲法のもと多
彩な言論や社会運動が花開き、政党内閣の
成立へと結実した時代でした。

日本における政党政治

議会開設以来わが国にもだんだんと政
党を中心とする政治が行われるような形
勢ができあがってゆき、それを「憲政の常
道」として尊重し、そうすべきだとする考
え方を持つ人々が、国民の中にも多くな
っていきました。しかしながら、政治の実権
はいぜん元老と呼ばれる数人の人々に牛
耳られていましたが、国民の政治に対する
関心も高まり、世論の力は、軍人の寺内内
閣のあとを受けて、原敬を首班とする内閣
を出現させました。この内閣は、陸軍・海
軍・外務の三大臣を除く全ての閣僚が政友
会の議員から選ばれ、総理大臣の原敬自身
も政友会の総裁であり、しかもそれまでの
華族や大将の内閣首班と違って全くの一
平民であったという意味で、日本における
典型的な政党内閣であり、国民も立憲政治
発達のためにこの出現を喜びました。

1925（大正14）年には、25歳以上の男
子には原則として選挙権をみとめる選挙
法改正案が議会で提出され、ついに成立

を見るに至りました。

他方また、働く国民すべての利益を主眼と
する政治をしなければならないという社会
主義的思想も早くから輸入され、1901（明治34）
年には、片山潜・阿部磯雄・幸徳秋水など
によって、社会民主党が組織されましたが、た
だちに政府によって解散させられてしまいま
した。しかし第一次世界大戦後の経済情勢か
ら労働運動が急激に高まり、次第に大衆の中
に根をおろしていき1928（昭和3）年に行わ
れた総選挙で、労働農民党・社会民衆党・日
本労働党などの無産政党も、8名の議員を議
会に送り込むなど、日本の政治はしだいに民
主主義の方向に向かってその水準を高めつつ
ありました。

政党政治の末路

しかしながら、このようにして、徐々に発
達してきた日本の民主主義の政治が、つぎの
ような原因で急に反民主主義の方向に逆転し
てしまいました。

第一の原因は、政党の随落です。

政党政治の発達とともに政党相互の争いが
激しくなると政党の勢力を広げるためには手
段を選ばないということが起こり、多数決で
運用される議会政治では数がものを言うよう
になります。そのため反対党の内幕をさらけ
出したり、議員の奪い合いをしたり、選挙で
は露骨なやり方で干渉をするようになります。
その結果、国民の信頼を失っていくこと



教科書「民主主義」(上) P93より

日本における

民主主義の歴史

第 4 回

連載するにあたって

無謀な戦争の反省から生まれた日本国憲法の3つの柱は、国民主権、基本的人権の尊重、恒久平和ですが、わが国の民主主義の歴史を振り返ると、明治、大正、昭和から現在へと「民主主義」の理念が、国民の中に底流として脈々と流れていることがわかります。しかし、その歴史は、「国体」思想との厳しい闘いの歴史であり、民主主義を守るためには、憲法に掲げられているように国民一人ひとりの「不断的努力」が求められていると思います。

になりますが、政権に野望をいだく連中がそこをうまく利用して民主主義反対の氣勢をあげることにつながりました。

第二の原因は、左翼思想が強まったため、1925(大正14)年には治安維持法が制定され、政府がこれをつかって弾圧を加えました。そのような流れが右翼の思想を強めることにつながりました。

第三の原因は、こうした情勢に乗じて、軍部が政治のうえに大きな力を振るうようになったことです。明治憲法では、陸海軍の統帥については議会も政府もどうすることもできないことになっていたため、軍人はそこを利用して思うがままに政治を左右するようになっていき、政党政治は次第にすたれて民主主義の精神も衰えてしまいました。1932(昭和7)年の「話せばわかる」、「問答無用」の五・一五事件や1936(昭和11)年の二・二六事件などの暴挙が繰り返されるにしたがい軍閥は力を持ち、これに従う官僚中の指導的勢力は、独裁的な制度を確立していくこととなり、政党は無力化し国民を代表するはずの議会も、有名無実の存在となっていきました。そうして、勢いのきわまるどころ、日華事変はついに太平洋戦争にまで拡大され、日本はまさに滅亡のふちに駆り立てられました。その滅亡の運命を最後の土壇場で食い止めたのは、1945(昭和20)年7月26日に連合軍によって発表されたポツダム宣言と、一億玉砕を叫んで怒り狂う主戦論の嵐の中で、かろうじてこれを受諾することを決意した細い一筋の理性の綱とであったことを、日本国民は永久に忘れてはならないのです。

(「教科書」下P246～P257を要約)

(註) 記事中の「教科書」とは、文部省著作教科書「民主主義」(上)・(下)教育図書刊行を指します。

お知らせ

◆「人権を考える集い」を開催◇

□ 10月27日(土)午後1時30分から海蔵小学校体育館で、講師に第二小山田特別養護老人ホーム施設長の西元幸雄様をお招きし、「住み慣れた地域でその人らしく暮らしていただくために」と題してお話をさせていただきました。海蔵地区はもとより地区外からも参加していただき百名弱の皆さんが熱心に聴講されました。

□ ますます高齢化が進む中で、自分の将来はどうなるのかという何らかの不安をお持ちの方も多と思います。現にいわゆる65歳以上の高齢者が総人口の2割を超えており、将来は4割を超える時代が到来することを考えた場合、国や行政など他人に全てをまかせる公助の時代ではなくなることは必至です。

安心と幸せな将来の暮らしを実現するには、先ずは、自ら解決するための自助努力が求められていることと、住民が住み慣れた地域で、いきいきと安心して暮らすことができるようにするためには、住民同士が共助しあう地域社会の構築がぜひとも必要であり、そのために今から汗と知恵を出し合って実現に向けて努力を重ねることを、住民一人ひとりにいま求められているのだということを教えていただきました。

□ 前例のない超高齢社会を乗り切るために何をすべきかを、あらゆる機会をとらえて声をあげ提案し、実現させていくという民主主義社会のルールを活用することが必要ではないでしょうか。



熟演される西元講師(上)と熱心に講演を傾聴される皆さん(下)

世界人権宣言

すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とにおいて平等である。人間は理性と良心とを授けられており、互いに友愛の精神をもって行動しなければならない。(第1条)

◆ 原稿募集 ◇

今年度は、隔月で発行したいと考えています。皆様からの投稿をお待ちしています。原稿は、地域団体事務局までお届け下さい。(広報部)